

2021年9月26日  
宮崎中部教会主日礼拝  
牧師 乾元美

## 詩編 51：3～6

ルカによる福音書 18：9～14

「わたしを憐れんでください」

### <天の父なる神さまに祈る>

わたしたちは、祈ります。世の多くの人々は、祈ることを知っています。でも、誰に、どこに向かって祈るべきかを知らない人々は、とても多いかも知れません。

困難が襲い掛かった時に、「神さま、仏さま、誰でもいいから助けて下さい！」と、祈る人がいます。でも、本当に祈るべき相手を知らない祈りは、心許なく空しいものです。

一方、教会に集っている者たちが祈る相手は、ただお一人だけです。そして、どなたかはっきりしています。わたしたちは、イエスさまが指し示してくださった、天の父なる神さまに祈るのです。

イエス・キリストの父なる神さまを信じる者にとって、「祈る」ということは、神さまと対話をすることであり、交わりの時を持つことであり、神さまに信頼して、神さまと共に生きていくことの、具体的な形なのです。

先週の聖書箇所 18：1 で、イエスさまは「気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された」とありました。

イエスさまは、わたしたちがどのようなお方に祈るのかを教えてくださいました。わたしたちは、わたしたちをお造りになり、愛して下さい、わたしたちの罪を赦すために御子イエスさまを遣わしてくださった、天の父なる神さまに祈るのです。

そうであるならば、父なる神さまは、ご自分の愛する子として受け入れて下さったわたしたちの祈りを、訴えを、叫びを、聞かれないことなどあるはずがない。いつも耳を傾けて下さる。そして必ず、救いを完成させて下さる。あなたたちをほうっておかれることは決してない。イエスさまは、そう教えて下さったのです。

だから、こう言われました。あなたがたは、気を落とさずに絶えず祈らなければならない。気を落とす必要がない。祈りが聞かれないことなどない。だから、確かな希望を持って、心からの信頼と安心をもって、祈り続けなさい、と。

### <祈る側のこと>

さて、今日の所は、この弟子たちへの教えの続きです。9 節には、「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対しても、イエスは次のたとえを話された」とあります。自分を正しい者だと信じている者に対して語られた、とのことですが、今日のイエスさまのたとえは、つまり、神さまに祈る者たちが、神さまの御前で、自分をどのような者だと思っ

登場人物は二人。ファリサイ派と徴税人です。二人は祈るために神殿に上ってきました。

### [①ファリサイ派の人]

まず、ファリサイ派。ファリサイ派は、ユダヤ人の中でも特に神の律法、掟を厳格に守ることを重んじ、神の民として清く正しく生きることを大切にしていた人々です。

ファリサイとは、分離する、という意味の言葉です。彼らは、神の民としての自覚と誇りを持ち、他の汚れた人々から自分たちを特別なものとして取り分け、清さを保とうと努力していました。それは並々ならぬ努力であったに違いありません。

ですから、彼らは自分たちが神さまの御心に適って、清く正しく生きている自信がありました。また、他の人から見ても、救われるなら、こういう立派な人がまず救われるに違いない、と思わされるような、尊敬を集める人々だったのです。

さて、11節に、「ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った。」とあります。

彼が祈ったことの一つはこうです。「神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。」

わたしが、他の人たちのように、罪人でないことを感謝します。自分はなんと、まともなのでしょうか。あの人は酷い。この人は愚かだ。この徴税人なんかはとんでもない。でも、わたしはそうではない。ありがとうございます。

彼の祈りは、自分と他人の罪を比較して、自分の優れていることを感謝する祈りでした。

もう一つは、「わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています」ということです。これは、自分が神さまのために行なっている立派なことを、アピールしているのです。

当時、断食は律法に定められたところによると、年に数回で良かったようです。それが、週に二度も断食している。わたしは、こんなに熱心な信仰者なのです、と。

また、献金については、定められた作物や生まれた家畜の十分の一を献げることとなっていました。しかし、彼は全収入の十分の一。あらゆる持ち物の十分の一を計算して献げていたのです。わたしは、こんなに努力をして献げ物をしています。神さまが律法で求めておられる以上のことを、行なっています。神さま、わたしはこんなに大変なことを自ら進んでやっているので、認めていただけますよね。

それは、自分の行いの成果や頑張りを報告するような祈りでした。

でも、この祈りで、ファリサイ派の人は、自分自身のことと、自分と比較するための他人のことしか見つめていません。肝心の神さまを、真っ直ぐ見つめていないのです。

11節には、「ファリサイ派の人は立って、心の中でこのように祈った」とありました。この「心の中」というのは、「自分自身に向かって」というような言葉です。彼は、神さまの御前に立って、神さまに向かって祈るのではなく、自分の正しさ、立派さ、誇るべきところを見つめて、それを神さまに売り込むような、そんな祈りをしていたのです。

それは結局、自分が満足するための祈りで、神さまへの本当の祈りではありません。

## [②徴税人]

さて、次は徴税人の祈りです。徴税人は、ファリサイ派の人と社会的な立場や評価も対照的なら、祈りの仕方も対照的でした。

徴税人とは、ローマ帝国から委託を受けて、ユダヤ人の同胞から税金を取り立てる仕事です。ローマ帝国の権威を借りて、多く取り立ててピンハネする者も多かったようです。

そして何より、神の民であるユダヤ人のくせに、異邦人であるローマ帝国の手先になるとは何事か、ということで、ユダヤ人の仲間から嫌われ、蔑まれる存在でした。

ですから、徴税人はまるで「罪人の代表」のように言われていました。先ほどのファリサイ派の人が、「神の民の代表」のような存在と思われていたのとは、まるで正反対です。徴税人は、真っ先に神さまの救いからこぼれ落ちる、と思われていた人々なのです。

さて、この徴税人の祈りはこうでした。13節「ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください。』」

「神様、罪人のわたしを憐れんでください。」このたった一言の祈りです。

神様、罪人のわたしを憐れんでください。新約聖書の中には、他にも「憐れむ」と訳された言葉が出て来ます。キリエ・エレイソン（主よ憐れみたまえ）という言葉が有名ですが、実はここはそれとは違う、珍しい単語が使われています。ここは、口語訳聖書では「神様、罪人のわたしをおゆるしてください」と訳されていました。ここの「憐れむ」は、本当は「罪をゆるす」、「償う」という意味の言葉なのです。徴税人は、「神さま、わたしは罪人です。わたしの罪をゆるしてください。」そう祈ったのです。

徴税人は、祈ろうとする時、神さまに向かって口を開こうとする時、完全な聖さと完全な正義を持っておられる神さまの御前で、自分がとても汚れた者であること。自分が神さまから離れて生きており、御心に従うことのできない、どうしようもない罪人であることを認めざるを得なかったのです。

これは、彼が自分の「徴税人」という仕事を、自分の「罪」だと言ったわけではありません。もっと人間の根本的な罪です。仕事も何もかも取り払った上で、一人の人間として、神さまの御前に立った時の、神さまに対する自分の罪。それを彼は告白したのです。

神さまの御前に立ち、神さまの御光を仰ぐとき。わたしたちは自分の汚れを、弱さを、罪を、神さまの御光に照らされて、明るみに出されるところに、立つことになります。

神さまの御前に出るとは、そのようなことです。神さまの正しさの御前で、自分の姿が明らかにされる。それはつまり、神さまに裁かれる、ということなのです。

わたしたちが祈る時、わたしたちは、この裁きの神さまの御前に立っているのです。

この神さまを見つめている徴税人は、神殿に近寄ることも出来ません。遠くに立っていま

した。そして、目を天に上げようとしませんでした。目を天に上げるのは、当時の祈りの一般的なスタイルです。でも、顔を上げることも出来なかった。自分の罪の汚れを知り、恥ずかしさを覚え、神さまに顔向けできなかったのです。

そして、胸を打ちながら言いました。「神様、罪人のわたしを憐れんでください。ゆるしてください。」胸を打つのは、大きな嘆きや悲しみを表すジェスチャーです。多くは、愛する人が亡くなったことを悼む時の、嘆きの表現です。死を思う嘆きです。神さまの御前で、自分が滅びるしかない罪人であることを思う時、彼は、嘆き悲しみ、神さまに救いを求めることしか出来なかったのです。彼が、神さまと共に生きるためには、神さまに近付くためには、神さまに罪をゆるしていただくしか道はないのです。

ですから、神さまに祈ろうとするとき、他の人の方が罪が重いとか、自分はましだとか、そんなことを言っている場合ではないのです。比べても何の意味もありません。

今、神さまの御前に立った時、神さまに対して、自分がどういう者であるか。それを見つめなければならないのです。

言い換えれば、それは、神さまがどのようなお方であるかを、しっかりと見つめるということです。神さまがどのようなお方かを知っているからこそ、その神さまの御前で、自分がどういう者であるかを知らされるのです。

そうであるならば、わたしたちは、神さまに対して「恐れ」を抱くのが当然です。神さまがわたしたちを裁かれる方である、という恐れです。この恐れなくしては、まことに神さまの御前に立っている、神さまを見つめている、と言うことは出来ないのです。

<義とされたのは>

さて、イエスさまのたとはここで終わりです。そして、イエスさまは言われるのです。14 節「言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。」

イエスさまは、この徴税人は義とされた。つまり、神さまに罪をゆるされて、正しいと認めteいただいた。そう宣言なさいました。

イエスさまは、父なる神さまの独り子です。罪を赦す権威をお持ちであり、その罪の赦しをすべての人に与えるために、地上に来られたお方です。このお方が、この神さまの御前に立って罪の赦しを願った徴税人は、赦されたのだ。そう言って下さったのです。

なぜなら、他でもない、この神の子イエスさまが、この徴税人の罪を肩代わりして、ご自分の十字架の死によって、罪を償って下さるからです。

それは、今ここにいる、わたしたちも同じです。わたしたちが自分ではどうしようもない自分の罪を知らされる時。胸を打って、嘆き悲しむしかない時。わたしたちが神さまの御前に立って、神さまに向かって、この苦しみを、この罪を差し出し、ただ救いを求めるなら。神さまはそれに応じて下さるのです。それを良しとして下さるのです。

神さまは、そのために、わたしたちに御子イエスさまを遣わされたのです。わたしたちは、罪の赦しを願う時、イエスさまの十字架の許へと招かれます。そこで、イエスさまは言うて下さるのです。それで良い。あなたの罪は、わたしが償う。あなたが背負いきれない罪は、すべてわたしが担う。あなたは、あなたの罪を償ったわたしと共に、神さまの御前に立ちなさい。あなたはゆるされる。あなたは、神の子として受け入れられる。あなたは、もはや全能の神、裁きの神、聖さと正義に満ちた神を、ただ恐れるのではなくて、わたしにあって、「アッバ、父よ」、「お父さん」と呼んでよいのだ。

嘆き、悲しみ、助けを求めることしか出来ない徴税人、そしてわたしたちは、まるで前回の聖書箇所、不正な裁判官に向かってただ訴え続けるしかなかった、やもめのようです。

そして、前回のところでイエスさまが教えて下さったのは、神さまはその叫びを、祈りを、確かに聞いて下さる、ということ。そして、必ず救って下さる、ということでした。

わたしたちが「神様、罪人のわたしを憐れんでください。ゆるしてください」と、ただ救いを求めて祈る時、その祈りは必ず聞かれるのです。神の御子イエスさまの十字架と復活の御業によって、罪の赦しがはっきりと示され、与えられるのです。

わたしたちは真摯に神さまの御前に立って、心から神さまに向かうこと、祈ることを通して、神さまの救いの恵みを、はっきりと見つけ、確かに受け取ることが出来るのです。

あのファリサイ派の人は、神さまの裁きを見つめ、恐れているとは言えませんでした。だからこそ、自分の真面目さや、良い行いや、正しさによって、自分は救いにふさわしいと思っている。自分の力で、罪から離れ、聖さを保っていると思っている。だから、神さま、この素晴らしいわたしをご覧ください、認めて下さい、と祈ってしまうのです。

神さまの正しさを見つめず、自分の正しさを見つめ、自分の行いにこそ救いの根拠があると信じ、神さまに救いを求めない。神さまのゆるしを求めない。それで、神さまからの救いを、イエスさまによる罪の赦しを、受け取ることは出来ないでしょう。

しかし、ここで気をつけなければならないのは、このたとえ話は、人に立派だと思われて、うぬぼれているファリサイ派の人がダメで、謙虚な徴税人が素晴らしい、というお話ではない、ということです。

そうであるなら、わたしたちはいつか、「わたしは自分を誇りません。わたしが、あのうぬぼれたファリサイ派のようではないことを感謝します」と祈るようになるでしょう。

そうではないのです。徴税人は、何か素晴らしいことをしたのではありません。ただ、本当に、神さまの御前に立つとはどういうことか、ということなのです。

その時、罪に捕らえられている者は、遠くに立つしかない。顔を伏せるしかない。ただ嘆き、悲しみ、「神様、罪人のわたしをゆるしてください」と言うしかない。彼はただ、神さまの御前でそうすることしか出来ない、罪人であった。そして、わたしもそのような罪人な

のだ、ということなのです。

しかし神さまは、このような者を、義として下さる、というのです。

遠くに立って、顔を伏せて、嘆き悲しみ、ただ神さまに救いを求めて叫ぶことしか出来ない、そんなわたしたちを。父なる神さまは、あの放蕩息子の父親のように、遠く離れていても見つけ、憐れに思い、自分から走り寄って首を抱き、接吻し、抱きしめ、わたしたちが神さまの許で生きることを、心から喜んで受け入れて下さるのです。

<神さまの御前に立つ>

最後にイエスさまは、「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」と言われました。

正しいか、罪人かどうかを決めるのは、わたしでも他人でもありません。わたしたちは、いつも自分と他人を比べて、自分を誇ったり、うぬぼれたり、あるいは他人を見下したりします。反対に劣等感を抱くことも、人から高く評価されたいという思いの表れです。

でも、わたしたち人間が、自分や他人を評価したり、裁いたり、救われるか救われないかを決めることは出来ません。

わたしたちを見ておられ、評価され、裁かれるのは、ただ神さまお一人だけです。神さまが、わたしたちを見つめておられる。神さまの御前に、このわたしが立ち、神さまが、このわたしの罪を裁かれる。そのことを弁えていなければなりません。

そして、恐れをもって裁きの神さまの御前に立つ、ということがなければ、イエスさまの十字架が、まことに、このわたしの罪のためであった、ということが分かりません。

反対に、神さまの御前で恐れを抱くなら、罪の自分に嘆くなら、神さまから自分が遠く離れていることを思うなら。わたしたちは、そこでこそ、このわたしの罪を赦すために遣わされたイエスさまの十字架を、鮮やかに示されるのです。ここに、あなたの罪の赦しがある。ここに神の子として生きる命がある。それを知らされるのです。

…さて、神さまの正しい裁きが、わたしたちの罪の赦しが、すべての者の目に見える形で完全に明らかにされるのは、終末の時。神の国の完成の時。イエスさまが再び来られる、最後の審判の時です。

しかし、わたしたちはイエスさまを信じることによって、今この時、すでに、罪の赦しの宣言を、聞かせていただいているのです。

主の日ごとに、御前に出る度に、祈る度に、わたしたちは罪の赦しを願わなければならない者です。しかしまたその度に、礼拝を通して、御言葉を通して、わたしたちは目の前にイエスさまの十字架を示され、「あなたの罪は赦された」との宣言を聞かせていただくのです。

わたしたちは日々、罪の赦しの中を生かされている者です。十字架と復活のイエスさまと共にあって、父なる神さまの恵みの中を歩む者です。

ですから、わたしたちにとって終わりの日、裁きの日は、滅ぼされるかも知れないとビク

ビクして待つものではありません。その日は、いよいよ、神さまの御前で完全な者としていただける日として、喜びの日として、希望を持って、備えつつ待つことが出来るのです。

わたしたちは、裁かれる神さまを、正しく恐れる者でありたいと願います。神さまの御前で、自分がどうしようもない罪人であり、常に悔い改めが必要であることを忘れてはいけません。

しかしまた、そのような罪人であるにも関わらず、イエスさまにあって罪を赦され、義とされ、神さまの子どもとされている。幼子のように、安心して、親しく「アッパ、父よ」「天の父なる神さま」と呼びかけることがゆるされている。この大いなる恵みに、驚きと感謝をもって、神さまの御前に出て、祈る者とされたいのです。

### 【お祈り】

天の父なる神さま

あなたは万物をお造りになり、すべてを支配され、正義を貫かれ、わたしたちを裁かれるお方です。あなたの御光に照らされる時、わたしたちは、あなたの御前に立っていることも出来ないほどに、あなたに対して罪を犯している者であることを覚えます。

神さま、罪人のわたしたちを憐れんで下さい。罪をお赦し下さい。

そしてまさに、このわたしたちの祈りに応えて下さるために、神さまは御子イエスさまをお遣わし下さり、わたしたちの罪と滅びの死を担わせられ、十字架に架けられました。イエスさまの罪の赦しに覆われて、今わたしたちは新しくされ、「父よ」とあなたを親しく呼んで、大胆に御許に近付き、あなたの御腕の中に、まことの安らぎを見出す者とされています。心から感謝いたします。

わたしたちの歩みが、あなたへの祈りが、どうか、御心に適ったものでありますように。また、この「祈り」に生きる幸いに、一人でも多くの者が招かれますように。

救い主である神の御子、イエスさまの御名によって祈ります。アーメン